二〇一五年一月九日

夕照にきらめく湖水淑気満つ　せいじ
冬凪へ水脈一筋や島渡し　さつき
頂に一灯点る雪の山　せいじ
朝一の焚火を囲む道の駅　うつぎ
再会を約す賀状の添書きに　満天
畑のもの訪ふも日課や霜の朝　三刀
日溜りの蝋梅殊によく香る　よし女
小春日に千手観音微笑みぬ　ぽんこ

二〇一五年一月八日

初御空白鷺城のいや白し　ともえ
塩味の加減気遣ふ七日粥　こすもす
一穢なき蒼天に凧上機嫌　雅流
金色の鵄尾孤高なる初御空　ひかり
たこ焼き屋人垣つくる初恵比寿　宏虎
キッチンの窓へほのぼの初明り　菜々
水仙郷玄海灘をパノラマに　さつき
朝刊を取りに出て知る寒さかな　明日香

二〇一五年一月七日

七草粥食べてシルバー歩く会　つくし
父の手に包まれ凧の糸を引く　有香
大釜の湯気立ち昇る七日粥　さつき
七種を詠ひつ刻む厨妻　満天
盛花に寒の水足す朝の窓　つくし
絵馬堂に幼の吉書犇きぬ　かかし

二〇一五年一月六日

万歩計けふは要なし寒の雨　明日香
部活子の袴凛々しき弓初め　はく子
路地親し春の七草分け合ひて　つくし

二〇一五年一月五日

初みくじ開きしかめっ面となる　なつき
四世帯納まりきらぬ初写真　かかし
ゆくりなく雪だるま見る加茂河原　菜々
初書の春といふ字が笑ひをり　明日香

二〇一五年一月四日

トレッキング姿で交はす御慶かな　さつき
風花し丹塗りの宮を荘厳す　菜々
子ら去にてやうやく安堵老の春　はく子
破魔矢享く夢二の女めく巫女に　かかし
弓始女師範も振袖に　よう子
銃声のとうんと響く冬の谿　みちほ

二〇一五年一月三日

淑気満つ千手を翳す大襷　よう子
屠蘇に酔ひ思はず本音洩らしけり　満天
初日記愛唱聖句書き加へ　かずこ
たつ湯気に檜匂へる初湯殿　ひかり
夕日影線描画めく冬木立　有香
と見る間に吹雪の晴れて嘘のごと　明日香
物干しの氷に肩を打たれけり　あさこ
吉本のごとき法話に初笑ひ　満天
海鳥の犇く礁に冬怒涛　なつき

毎日句会みのる選・二〇一五年一月一一日